

「英訳聖書における動詞SAYの時制」

半 田 一 吉

I. 欽定訳聖書に影響を与えた諸訳

1611年のJames 1世のいわゆる Authorized Version (以下 A.V.) は、Canterbury 大司教代行だった Richard Bancroft の指名による 54 人 (実際は 47 人?) の学者の手になるものであるが、これは 1568 年の Bishops' Bible に準拠して、できるだけ変更を加えないことを旨とし、Tyndale 訳、Matthew 訳、Coverdale 訳、The Great Bible、The Geneva Bible などにも必要に応じて参照されており、Oxford、Cambridge 両大学のヘブル語とギリシア語の教授が加わっているのも、もちろん原語も調べられている。Butterworth の推計¹⁾によると、A.V. が先人の業績に負っている比率は、phrase と clause 単位で見て、Apocrypha を除外した場合、次の如くである。

Wiclif	(1380-1400)	4 %
Tyndale	(1525-1535)	18 %
Coverdale	(1535-1541)	13 %
The Geneva Bible	(1557-1560)	19 %
The Bishops' Bible	(1568-1572)	4 %
その他の 1611 年以前の訳		3 %
A.V. 独自の訳		39 %

この中で、Wiclif (Wyclif, Wycliffe とも綴られる) には、Nicholas of

「英訳聖書における動詞 say の時制」

Hereford や John Purvey の手になると言われる英訳聖書のほかに、Wiclif 自身の説教集の中の引用も含める。Tyndale には彼自身の手になる新約全訳と旧約の一部のほかに、未出版も含めて彼の訳を主体としている所謂 Matthew 訳も含める。Coverdale には彼自身が最初に出した全訳のほかに、後年 Cranmer 大司教の要請で改訳した所謂 Great Bible も含める。Geneva Bible には、訳者 William Whittingham が、それに先立って出版した Geneva New Testament も含め、Bishops' Bible はその改訂版も含んでいる。ところで、たとえば Bishops' は Great に基礎を置いているなど、いずれも既存の訳に多かれ少なかれ影響を受けているので、同じ訳語が幾つもの版に共通して見られるのが普通であるから、このように百分比を出すことは決して容易ではないが、Butterworth の推計が正しければ、61% は既存の訳を踏襲していることになる。

本小論においては、新約聖書のマルコ福音書中の λέγω および εἶπον という動詞が、英訳聖書中でどのように訳され、A.V. を他の訳と比較した場合どのような関係になっているかを調べて、動詞 say の時制について考えてみようとするものである。

II. マルコ福音書における動詞 say

英語聖書で say (現在、過去の各形態) に訳されているのは、原語では λέγω と εἶπον である。前者は現在形では λέγω (1人称単数), λέγεις (2人称単数), λέγει (3人称単数), λέγετε (2人称複数), λέγουσι(ν) (3人称複数) が出てくる。現在形以外で比較的多いのは未完了過去で、ἔλεγε(ν) (3人称単数) と ἔλεγον (3人称複数) である。一方 εἶπον は ἔπω の第2不定過去 (aorist) で、直説法では εἶπε(ν) (3人称単数) と εἶπον (3人称複数) が用いられ、事実上 λέγω の不定過去の役をつとめている。λέγω の1人称単数現在形は17回出てくるが、

Σοὶ λέγω (I say unto thee)

Λέγω ὑμῖν (I say unto you)

のような用い方に限られており、Vulgata (ラテン訳) では dico であり、英訳でも各訳ともすべて現在形であって問題がない。2人称現在は単数形、複数形とも1回ずつ出てくるだけであるから、ここでは論じないこととする。問題は3人称であって、単数現在の λέγει も複数現在の λέγουσι(ν) も、その時と時制の関係が一様ではなく、英訳では現在形になるものと過去形になるものがあり、訳者によって時制が一定していない。不定過去である εἶπον も英訳では現在形をとる場合が出てくるので、それぞれの実情を個別に見てゆくこととしたい。

未完了過去 ἔλεγε(ν) (3人称単数) と ἔλεγον (3人称複数) については、前者 27 例は、ラテン訳では未完了過去 dicebat (23), 同 aiebat (1), 完了 dixit (1), 現在 ait (2) であるが、英語は全部過去形であり、後者は 15 例中ラテン訳は全部未完了過去の dicebant で、英語も全部過去形であるので、ここでは問題にしない。

III. λέγει の場合

λέγει は 53 回出てくるが、Vulgata (ラテン訳), Wiclif, Tyndale, Cranmer (大聖書), Geneva Bible, Rheims (Rhemes) Bible との比較は別表 (I) の通りである。A. V. での英語は saith が 36, sayth が 3, sayeth が 1, said が 11, sayd が 1, answered, saying が 1 となっているが、saith, sayth, sayeth は綴りが違うだけで同じものであり、said と sayd も同じものであるから、整理すれば現在形が 40, 過去形が 12, answered, saying が 1 ということになる。

これを先ずラテン語の Vulgata と比較してみると、ラテン語で用いられている動詞は ait (aio の 3人称単数現在), dicit (dico の 3人称単数現在), dixit (dico の 3人称単数完了) である。aio も dico も共に「言う」の意味である

「英訳聖書における動詞 say の時制」

が、後者が単に to speak の意味であるのに対して、前者は to assert, to state を意味する。しかし聖書中では共にギリシア語の同じ動詞の訳として用いられており、両者の間に使用上の区別があるとは思えず、その使い分けは恣意的なものと思われる。現在形の ait は 38 例で、A. V. では現在形 29, 過去形 9 に分かれる。やはり現在形の dicit は 13 例で、A. V. では現在形 10, 過去形 2, answered, saying 1 となっている。

完了形の dixit は 2 例しかないが、このうち XII 36 は別表 (I) のすべての訳で過去に訳されており、ラテン語の影響が強く感じられるのに対して、VI 50 では A. V. だけが saith で、他はすべて過去形である。(この節については、後で改めて述べる。)ラテン語の完了形には 2 種の用い方があり、一つは英語の現在完了に相当する意味をもつ場合であって、もう一つはギリシア語の不定過去に相当する場合で、歴史的記述によく用いられ、過去のある瞬間に完了した行為を指す場合である。ここでの dixit は後者の場合であるから、英語では said になるはずだが、既述のように A. V. では saith と said が各 1 となっている。

ait, dicit, dixit の区別は Wiclif と Rheims に若干の影響を及ぼしているようだが、両者とも Vulgata にもとずいて訳されていることを思えば当然であろう。しかし A. V. では、この区別はほとんど関連が見られない。

次に Wiclif 訳では、現在形 (seith) が 9 例、過去形 (seid, seide) が 44 例である。V 9 が answered, saying になっている 1 例を除けば、seith は A. V. では皆 saith に訳されているのに対して、seid(e) は A. V. では saith 32, said 12 に分かれている。Wiclif ではこの動詞は過去形が主流であるが、現在形 9 例は XI 2 を除いて、全部ラテン語 dicit に対応している。またラテン語に 13 例ある dicit は、Wiclif では seid(e) 5 例に対して現在形が 8 例であるのは、やはり Wiclif が ait と dicit の区別に左右されていると思われる。完全に一致していないのは、Wiclif 訳で用いられた Vulgata と、現在市販されている Vulgata が同じではないためという可能性もある。いずれにしても、この動詞に関しては Wiclif と A. V. との間に目立った対応は見られない。

Tyndale の場合は、6 種の訳の中で A. V. との一致が最も少ない。Tyndale 訳は say でなく axeth (=asks) を用いている XIV14 を唯一の例外として、全部過去形 (sayd, sayde) であり、例外になっている XIV14 は、別表 (I) の各訳が全部現在形をとっている唯一の箇所である。

Tyndale は Vulgata を用いず、直接ギリシア語から訳しているが、原語の真意と英語の慣用を考えて過去形にしたのであろう。Tyndale が過去形にした箇所は、A. V. では 39 例が現在形、12 例が過去形になっている。II 10 では Tyndale は spake を用い、Cranmer も Geneva もこれを踏襲しているが、A. V. では saith である。V 9 は answered saying で、comma のないことを除けば A. V. と同じであり、Geneva は Tyndale と全く同じ、Cranmer は answered and sayde の形をとっているが、answered を用いることでは Tyndale を踏襲している。この箇所は、原語、ラテン語、Wiclif においては、何ら他の節と異なるところがないのを見ると、Tyndale の創意によるものと思われる。

Cranmer の聖書 (所謂 Great Bible) は、A. V. の基礎となった Bishops' Bible が重視していたものであるだけに、A. V. との一致は比較的多く、31 例が A. V. と同じ tense になっている。II 10 が spake になっているのは Tyndale や Geneva と同じで、V 9 と同様、他の 2 者が Tyndale を踏襲したものであることは容易に推察できる。V 9 と違うのは、A. V. がこれによらないで saith になっていることである。Cranmer の say(e)th 24 例は、A. V. では saith 21, said 3 となっており、sayd(e) は saith 18, said 9 である。spake と answered and sayde については既述の通りである。

Geneva は 3 例 (XIV14, 37, 41) が say(e)th になっているのを除いて、全部過去である。(大部分 sayd で、一部 said という綴りになっている。) 例外 3 例は全部 XIV 章に集中しているが、このうち 14 節は、今比較しているすべての訳で現在形になっている箇所、ラテン語は dicit だが、他の 2 例は ait で、特に他と違った条件は見られないので、何故この 3 ヶ所だけが他と違っている

「英訳聖書における動詞 say の時制」

のかは謎である。A. V. は 3 例とも saith であるが、Geneva の sayd (または said) 48 例中、12 例が A. V. で過去形になっているだけで、他は現在形になっている。V 9 の answered saying は Tyndale で触れた通り、A. V. でもほぼ同じであり、II 10 の spake は saith になっている。Geneva Bible は国王公認の Great Bible を圧して、一般の人気の高かったが、この動詞の tense に関する限り、A. V. への影響はほとんどないと見てよい。

Rheims New Testament は Douai Old Testament と対をなすローマン・カトリック訳で、Vulgata を基礎にしている。現在形が圧倒的に多く、saith が 45 例で、said は 8 例しかない。過去 8 例中、VI 50 と XII 36 は、ラテン語で dixit であるから、これを踏襲したものであることは間違いなからうが、その他は dicit 3, ait 3 となっていて、これも訳者 Gregory Martin が用いた 16 世紀の Vulgata では、現在のものと異なり、みな dixit になっていたかもしれない。

(このことは、或いは Vulgata の原形を考察する資料になるかもしれない。) saith のうち、36 例が A. V. でも現在形で、8 例が過去、1 例は answered になっている。Rheims の過去形 8 例は、A. V. では現在形と過去形が 4 ずつである。A. V. と一致している箇所 40 という数は、ラテン語を含む 6 訳中、ラテン訳と同数で最も多いが、このことをもって、Rheims が A. V. と大きな関わりがあると見るのは早計である。これは Rheims では現在形が主体になっているのに対して、A. V. でもたまたま現在形が多かったので一致したにすぎないのであろう。Rheims が諸訳中で時代的に最も A. V. に近いことは、語法の時代的な慣習という点での関係はあっても、A. V. が Rheims を取り入れたということは、教派的に見ても可能性が少ない。Butterworth の表では、Rheims の影響は単独ではあげられていない位である。

Wiclif から A. V. までの六つの英訳において、λέγει の訳の tense に関して一番多いパターンは、Rheims と A. V. だけが現在形で、他は全部過去形という場合で、14 例あり、ラテン語は全部 ait である。次に多いのは、Cranmer, Rheims, A. V. が現在形で他は過去形になる場合で、12 例であるが、ラテン語

は ait 10, dicit 2 に分かれる。あとはずっと少なくなって、Rheims だけが現在形で他は全部過去形が 5 例（ラテン語は ait）、Tyndale と Geneva だけが過去形で他は全部現在形が 5 例（ラテン語は dicit）見られる。全部現在形は XIV14 だけ（ラテン語は dicit）、全部過去形は XII36 だけ（ラテン語は dixit）である。

以上のことから判断できることは、各訳にラテン語の影響が幾らか見られることと、A. V. はいずれの英訳からも特に影響を受けてはいないということ位である。各例の主語について分類してみても、やはり動詞の時制との関連は特に見られない。Butterworth の表は phrase と clause 単位であるから、λέγει の場合を同一視することはできないが、同表で一番パーセンテージの高い Tyndale と Geneva が、ここでは一致数が一番少ないという皮肉な現象が見られる。このことは後述のように、英語において、過去を表現する場合の現在形と過去形の使い分けに、有意義な区別がない場合があることを示している。

さて前述のように、VI 50 は、ラテン語が dixit で他の 5 訳がすべて過去になっているのに、A. V. だけが現在形 saith になっている大変珍しいケースである。しかもこの節は、καὶ εὐθέως ἐλάλησε μετ' αὐτῶν, καὶ λέγει αὐτοῖς (and immediately hee talked with them, and saith vnto them) であって、すぐ前に talked という過去形が来て and で結ばれているので、この現在形は余計目立つわけである。ἐλάλησε は λαλέω (to talk) の不定過去 (aorist) であり、λέγει は現在形であるから、talked が過去形で saith が現在形であるのは、原語から見れば正確な訳といえる。A. V. で福音書の翻訳を担当したのは、Oxford の学者達で、同大学のギリシア語教授であった John Perin が責任者として加わっているため、ラテン訳や他の訳をとびこえて、原語にもとずいて訳したと考えても不自然ではないが、それにしても他の箇所では、λέγει を過去形に訳している例も多数あることが説明できなくなる。これはやはり、saith と said は全く区別なく用いられており、たまたまその箇所を訳した人によって恣意的に選択されていて、VI 50 だけが他の訳と異なっているのは、全く

「英訳聖書における動詞 say の時制」

の偶然と考えるほかはなさそうである。

なお複数形 λέγουσι(v) については, A. V. では次のような数になっている。各訳ともその比率は, 単数の場合とほぼ一致する。

		Wic.	Tyn.	Cra.	Gen.	Rei.	A.V.	計
現在	seien say(e)	0	1	6	1	8	8	24
過去	seiden sayd(e) said	11	9	4	9	2	3	38
came saying		0	1	1	1	1	0	4

ラテン語は現在形 dicunt 8, 完了形 dixerunt 2 のほかに, Wiclif と A. V. を除く 4 訳で saying という分詞に訳されている絶対的奪格の dicentes が 1 (VI 35) である。この VI 35 ではラテン語の影響がはっきり見られるが, ギリシア語から直接訳した Tyndale がこの影響を受け, Vulgata によって訳した Wiclif がこの影響をまぬがれているのは, A. V. だけが他の 4 訳と異なっていることと共に, 面白いケースと言ってよいであろう。

IV. εἶπε(v) の場合

εἶπε(v) は 3 人称単数の不定過去であって, 別表(II)に見るように, 現在形 λέγει の 53 より多く, 全部で 57 あるが, 英訳では圧倒的に過去形が多い。A. V. では said 46, saide 3, sayd 4 (以上計 53), spake 2, told 1 に対して, 現在形は saith ただ一つ (VIII 34) である。これは他の英訳においても, ほぼ似た数字になっているが, Tyndale と Geneva では, 現在形は一つも見られない。II 8 では, Wiclif, Cranmer, Rheims が現在形で, A. V. は said であり, Wiclif と Cranmer では, これが現在形になっている唯一の箇所である。この箇所が特に現在形になるべき理由は見当たらない。Cranmer と Rheims が Wiclif に従ったと解釈すれば簡単であるが, 両者とも Wiclif をあまり参照し

てはいないはずである。Wiclif 訳で訳者 (Hereford?) が、ここだけを seith にしたのは、ラテン語が dicit だからと考えることもできようが、あと 2 回でてくる dicit は seide になっている。これは最初の時と、あとの方とで気が変わったか、例によって Vulgata が現在のものと異なっていたとでも考えるほかはない。

III 9 を Tyndale が commaunded (=commanded) にしたのは、次のような発言の内容から考えてのことであろう。

And he commaunded his disciples, that a shippe shuld wayte on him, because of the people, leste they shuld throunge him.

Cranmer と Geneva は明らかに Tyndale に従ったものである。Rheims はこれを spake にしており、これは NED の speak IV 22 b (With objective clause: To state or declare that, etc.) に該当するものであろうが、Tyndale の commaunded を意識したものかどうかは分からない。A. V. がやはり spake になっているのは、珍しく Rheims を取り入れた場合と考えられる。XII 26 が、Wiclif 以下全英訳が spake であるのは、ラテン訳 (dixerit) の影響かと思われる。

各訳を個別に見てゆくと、ラテン訳では、現在形が dicit 3, ait 30, 完了形 dixit 22, 未来完了 dixerit 1, 過去完了 dixerat 1 と 5 種になっている。このうち XII 26 が未来完了になっているのは, quomodo dixerit illi Deus という接続節中にあるからで、英語ではすべて過去で、spake になっている。現在形 ait と完了形 dixit の交替はめまぐるしく、第 X 章などでは、ほとんど交互になっている。A. V. では 1 箇所を除いて、全部過去形をとっているのだから、ラテン訳との一致は 21 例しか見られない。

Wiclif は seide 55, seith 1, spake 1 である。Wiclif は Vulgata をもとにして訳しているが、ラテン語における ait と dixit の区別はすべて無視しているわけである。ただ一つ登場する dixerit が spake になっているのは、これも

「英訳聖書における動詞 say の時制」

Wiclif 中 1 箇所だけなので、意識して動詞を変えたと思われる。A. V. とは 53 例において全く一致している (seide—said, saide, sayd; spake—spake) が、他の 4 例中 2 例も時制だけは一致している。

Tyndale は sayde 41, sayd 14, spake 1, commaunded 1 であって、A. V. と全く一致するもの 54 (sayd, sayde—said, saide, sayd; spake—spake), 時制のみ一致するもの 2 である。

Cranmer は sayde 35, sayd 19, sayeth 1, commaunded 1, spake 1 で、II 8 以外は綴り字を問題にしなれば、Tyndale と一致している。A. V. との一致は、sayd(e)—said(e), sayd が 52, spake—spake 1, 時制のみ一致するもの 2 である。

Geneva は sayd 53, said 2, spake 1, commaunded 1 で、A. V. との一致数は Tyndale の場合と全く同じである。

Rheims は said 52, saith 3, spake 2 であるが、ラテン語にもとずいて訳したこの訳で、II 8, XII 36, XIV 62 だけが現在形になっている根拠は考えられない。特に XIV 62 はラテン語でも完了形なのだから尚更である。A. V. との一致は said—said(e), sayd が 50, spake—spake 1, said—told 1 で、他の 4 例は時制が一致しない。

以上見てきたところでは、既述の通り、 $\epsilon\acute{\iota}\pi\epsilon(\nu)$ は $\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota$ に比して英訳間に差異は少なく、51 例において六つの英訳全部が一致している。これは原語において、過去時の描写に現在形を用いている $\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota$ のような場合と違って、時と時制が一致しているからである。従ってこの場合は、A. V. が特にどの訳の影響を受けているとは言い難い。A. V. だけが他の 5 訳と異なっているのは、VIII 34 と IX 12 の 2 箇所、他がみな said (seide, sayd, sayde) であるのに、A. V. だけがそれぞれ saith, told になっている。後者の場合も、節を直接目的にし、間接目的を伴う場合は他にも幾らでもあるので、この場合だけ told になっているのは、むしろ珍しいケースと言える。

V. 英訳聖書における現在形と過去形

IIIで見てきたギリシア語の λέγει, ラテン語の ait と dicit, 英語の saith は、いずれも過去の事柄について叙述するのに現在形を用いているので、いわゆる歴史的現在 (historical present), Jespersen の用語では劇的現在 (dramatic present) と呼ばれるものである。Jespersen によれば²⁾, これは日常普通の語法で、ギリシア語でも、B. C. 10 世紀の Homer には全く見られないが、B. C. 5 世紀の Herodotus には頻繁に用いられているという。すなわち、この用法は文学的に品位が低いとされたために、文語に出現するのがおくれたのであるが、Herodotus より更に 5 世紀以上後の新約聖書は、Koine と呼ばれる通俗ギリシア語で書かれているので、この用法が更に多く見られるのは自然なことと言えよう。

英語においては、古期英語時代にはこの用法は稀で、中期英語では詩において多く見られるようになってきているが、散文では少なかった。このことは、この時代に属する Wiclif 訳では、λέγει を seide に訳した例が圧倒的に多くて、saith がきわめて少ないことでも立証される。それでも若干の現在形が見られるのは、やはりラテン語の影響であろう。Sweet³⁾もこの用法はラテン語とフランス語の文学的影響によるものとみとめている。

Tyndale や Geneva においても、λέγει の場合、現在形は非常に少ないが、Cranmer ではやや増加し、Rheims では突然過去形を圧して主流になっているのは、ラテン語の影響と共に、時代の趨勢にもよるものであろう。これ以後、A. V. においても現在形が優位に立っていることは既述の通りであるが、近世英語においては、口語で挿入的な said he に代わって、says he が用いられることが多くなっている実情とも合致する。これを現在形にするか過去形にするかは、多くの場合表現効果の上でも差異はほとんどなく、歴史的現在についてよく言われるように、過去の出来事を眼前に彷彿として描き出すというような

「英訳聖書における動詞 say の時制」

意図は、必ずしももっていない場合が多い。

細江逸記博士⁴⁾は、tense は本来 time を表現するものではなく、mood と同様、思想様式の区別を表わすものであるという説を、夙に述べておられるが、聖書の諸訳における he says と he said の間には、特にそのような思想様式上の区別も存せず、両者は全く同じものであると断じて差し支えないと思う。

Jespersen は MEG⁵⁾の中で、present tense が past time を表わす場合について述べ、「話者はあたかも時についてすっかり忘れ、自分が詳述しつつある事ごらを、眼前に見るかの如くいきいきと想像し、あるいは思い起こす。この現在形は過去形と交替することも極めて多い。」と言って、その例の中に A. V. のヨハネ福音書から “he abode……Then after that, saith hee……His disciples say vnto him……Jesus answered……These things said hee, and after that he saith……” (XI 6 - 11) を例としてひいている。これを他の訳と比較してみると次のようになる。say だけを出てくる順序でみると：

Gr.	Lat.	Wic.	Tin.	Cra.	Gen.	Rhe.	A. V.
λέγει	dicit	seide	sayd	sayd	sayd	saith	saith
Λέγουσιν	Dicunt	seien	sayde	sayd	sayd	say	say
εἶπε	ait	seith	sayde	sayde	sayd	said	said
λέγει	dicit	seith	sayde	sayd	sayd	saith	saith

これを見ると、A. V. は Rheims と共に、原語に全く忠実であり、特に Rheims は珍しく、ラテン語よりも原語に従っている。Tyndale, Cranmer, Geneva は原語にもラテン語にも従わず、全部過去形になっているが、Wiclif は 2 箇所において、原語とわざわざ逆になっている。A. V. だけを見た限りでは、Jespersen の説明にぴったりの例のようにも見えるが、同時に原語の tense に忠実に従っただけともとれる。Jespersen はこのあとで、歴史的現在は外国語の影響ではなく英語固有の通俗的な発達だとする Vernon Lee の見解を紹介しているが、この例に関する限りは、ギリシア語の影響の可能性も大きいのではないだろう

うか。Poutsma⁶⁾も歴史的現在特定の言語だけに特有のものではなく、すべての言語に共通の現象であると述べて、過去のことを述べるのに現在形が用いられる色々の場合をあげている。

しかし本小論のIIIとIVで見えて来た例は、say の現在形と過去形が何ら特別の理由なく交替して、同じ意味に用いられている場合があることを示している。Sweet, Jespersen, Poutsma 等のいずれにも、そのように明示も示唆もされてはいないが、過去の意味に用いられる動詞の現在形の用法として、そのような場合を加えてもよいと思う。

「英訳聖書における動詞 say の時制」

註) \

- 1) C. C. Butterworth: The Literary Lineage of the King James Bible
(chap. XII)
(Univ. of Pennsylvania Press, 1941)
- 2) Otto Jespersen: The Philosophy of Grammar (p. 258)
(George Allen & Unwin LTD, 1924)
- 3) Henry Sweet: New English Grammar (§ 2228)
(Oxford at the Clarendon Press, 1891)
- 4) 細江逸記: 動詞時制の研究
(泰文堂, 1932)
- 5) Otto Jespersen: A Modern English Grammar (Part IV, p. 19)
(George Allen & Unwin LTD, 1931)
- 6) H. Poutsma: A Grammar of Late Modern English (Part II, Section II, p. 254)
(P. Noordhoff, 1926)

(その他の参考文献)

The English Hexapla (AMS Press, 1975)

The Facsimile of the King James Version
(Oxford Univ. Press, 1911)

Nouum Testamentum Latine (Secundum Editionem Sancti Hieronymi)
(Oxford Univ. Press, 1911)

A. C. Partridge: English Biblical Translation
(Andre Deutsch, 1973)

H. Wheeler Robinson: The Bible in Its Ancient and English Versions
(Oxford at the Clarendon Press, 1940)

Geddes MacGregor: The Bible in the Making
(John Murray, 1961)

別表 I (1)

λέγει

章 節	Latin	Wiclif	Tyndale	Cranmer	Geneva	Rheims	A.V.
I 38	ait	seide	sayd	sayd	sayd	saith	said
41	〃	〃	sayde	sayeth	〃	〃	saith
44	dicit	〃	sayd	〃	〃	〃	〃
II 5	ait	〃	sayde	sayde	〃	〃	said
10	〃	〃	spake	spake	spake	〃	saith
14	〃	seid	sayde	sayde	sayd	〃	said
17	〃	seide	〃	〃	〃	〃	saith
III 3	〃	〃	〃	〃	said	〃	〃
4	dicit	seith	sayd	sayth	sayd	〃	〃
5	〃	〃	sayde	sayeth	〃*	〃	〃
34	ait	seide	〃	sayde	〃	〃	sayd
IV 13	〃	〃	〃	〃	〃	〃	said
35	〃	〃	〃	〃	〃	〃	saith
V 9	dicit	seith	*(1)	*(2)	*(3)	〃	*(4)
19	ait	seide	sayde	sayde	sayd	〃	sayth
36	〃	seid	〃	〃	〃	〃	saith
39	〃	seide	〃	〃	〃	〃	sayth
41	〃	〃	〃	sayeth	〃	〃	said
VI 38	dicit	seith	〃	sayde	〃	〃	saith
50	dixit	seide	〃	sayd	〃	said	〃
VII 18	ait	〃	sayd	sayde	〃	saith	〃
28	dicit	〃	sayde	〃	〃	said	said
34	ait	〃	〃	sayd	〃	〃	saith
VIII 1	〃	〃	sayd	〃	said	saith	〃
12	〃	〃	sayde	sayeth	sayd	〃	〃
17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
29	dicit	seith	〃	〃	〃	〃	〃
	ait	seide	sayd	〃	〃	said	〃
IX 5	〃	seid	sayde	〃	〃	〃	said
35	〃	seide	sayd	sayde	said	saith	saith
X 11	dicit	〃	sayde	sayeth	sayd	〃	〃
23	ait	〃	〃	sayde	〃	〃	〃
27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
42	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

「英訳聖書における動詞 say の時制」

別表 I (2)

章 節	Latin	Wiclif	Tyndale	Cranmer	Geneva	Rheims	A.V.
XI 2	ait	seith	sayde	sayeth	sayd	saith	sayth
21	dicit	seide	〃	sayde	〃	said	saith
XII 16	ait	〃	〃	sayeth	〃	saith	〃
36	dixit	〃	〃	sayde	〃	said	said
43	ait	〃	〃	sayeth	〃	saith	saith
XIII 1	〃	〃	〃	sayde	〃	〃	〃
XIV 13	dicit	seith	〃	sayeth	〃	〃	〃
14	〃	〃	axeth	〃	sayth	〃	〃
27	ait	seide	sayde	〃	sayd	〃	〃
30	〃	〃	sayd	〃	〃	〃	〃
32	〃	〃	sayde	〃	said	〃	〃
34	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
37	〃	〃	sayd	〃	sayeth	〃	〃
41	〃	〃	〃	sayde	〃	〃	〃
45	〃	〃	〃	sayeth	sayd	〃	sayeth
61	dicit	〃	sayde	sayde	〃	said	said
63	ait	〃	sayd	sayd	〃	saith	〃
67	〃	〃	〃	sayeth	〃	〃	〃
XVI 6	dicit	seith	〃	〃	〃	〃	saith

*(1) answered saying

*(2) answered and sayde

*(3) answered saying

*(4) answered, saying

別表II(1)

εἰπε(ν)

章 節	Latin	Wiclif	Tyndale	Cranmer	Geneva	Rheims	A.V.
I 17	dixit	seide	sayde	sayde	sayd	said	said
II 8	dicit	seith	”	sayeth	”	saith	”
19	ait	seide	”	sayde	”	said	”
III 9	dixit	”	commaunded	commaunded	commaunded	spake	spake
IV 39	”	”	sayde	sayde	sayd	said	said
40	ait	”	”	”	”	”	”
V 7	dicit	”	”	”	”	”	”
34	dixit	”	”	sayd	”	”	”
VI 16	ait	”	sayd	sayde	”	”	”
22	”	”	”	”	”	”	”
24	dixit	”	sayde	”	”	”	”
”	”	”	”	”	”	”	”
31	ait	”	sayd	sayd	”	”	”
37	”	”	sayde	”	”	”	”
VII 6	dixit	”	”	”	”	”	”
27	”	”	”	sayde	”	”	”
29	ait	”	”	”	”	”	”
VIII 34	dixit	”	sayd	”	”	”	saith
IX 12	ait	”	sayde	sayd	”	”	told
17	dixit	”	”	”	”	”	said
21	ait	”	”	”	”	”	”
23	”	”	”	”	”	”	saide
29	dixit	”	”	sayde	”	”	said
36	ait	”	”	”	”	”	”
39	”	”	”	sayd	”	”	”
X 3	dixit	”	sayd	”	”	”	”
5	ait	”	”	”	”	”	saide
14	”	”	”	”	”	”	said
18	dixit	”	sayde	sayde	”	”	”
20	ait	”	sayd	sayd	”	”	saide
21	dixit	”	sayde	”	”	”	said
29	ait	”	”	sayde	”	”	sayd
36	dixit	”	”	”	”	”	said
38	ait	”	sayd	sayd	”	”	”
51	dixit	”	sayde	sayde	said	”	”
52	ait	”	”	”	sayd	”	”

「英訳聖書における動詞 say の時制」

別表II(2)

章 節	Latin	Wiclif	Tyndale	Cranmer	Geneva	Rheims	A.V.
XI 14	dixit	seide	sayde	sayde	sayd	said	said
29	ait	〃	〃	〃	〃	〃	sayd
XII 15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	said
17	dixit	〃	〃	〃	〃	〃	〃
24	ait	〃	〃	〃	〃	〃	〃
26	dixerit	spake	spake	spake	spake	spake	spake
32	ait	seide	sayde	sayde	sayd	said	said
34	dixit	〃	〃	〃	〃	〃	sayd
36	dicit	〃	〃	sayd	〃	saith	said
XIII 2	ait	〃	〃	sayde	〃	said	〃
XIV 6	dixit	〃	〃	〃	〃	〃	sayd
18	ait	〃	〃	〃	〃	〃	said
22	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
48	〃	〃	sayd	sayd	〃	〃	〃
62	dixit	〃	sayde	〃	said	saith	〃
72	dixerat	〃	sayd	sayde	sayd	said	〃
XV 2	ait	〃	sayde	sayd	〃	〃	〃
12	〃	〃	sayd	sayde	〃	〃	〃
39	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
XVI 15	dixit	〃	〃	〃	〃	〃	〃